



窓に浮か
ぶ大顔

川崎ゆきお

ベッドから窓が見える。二階の部屋。窓の向こう側は狭い庭。余地だろう。すぐにブロック塀があり、隣の家。窓の下は何もなく、そのまま地面まで一直線。窓は崖に空いた穴のようだ。ベッドのある部屋の真下は居間。狭いが部屋数の多い家だ。

「分かりますか、この構造」

「ああ何となく。でも密室殺人事件なら、もっと細やかな情報が欲しいですねえ。窓の真上は」

「真上は浅い庇で、その上は壁で、その上は勾配のある屋根です」

「実物を見れば分かりやすいのですが」

「壁は新建材、はめ込み式です。屋根も樹脂製」

「問題はその窓ですか」

「そうです。アルミサッシのシンプルな窓で、畳一枚横に置いたような大きさです」

「それで、その窓がどうかしましたか」

「構造を先に述べましたが、要するに壁にぽかりと開いた窓で、出っ張りはありません」

「はい」

「夏場は開けっ放しのままでした」

「蚊が入るでしょ」

「網戸があります」

「窓の説明のとき、網戸については触れられていませんでしたねえ」

「あ、はい」

「それで」

「その夜はカーテンが開いていました」

「カーテンの説明もありませんでしたよ」

「ああ、見ればすぐに分かるのですが、普通の住宅にあるような窓で、普通にカーテンぐらいはあるでしょ。だから省きました」

「遮光カーテンですか」

「そこまで説明が必要ですか」

「場合によっては」

「遮光ではありません」

「窓は硝子窓でしょ。これは普通に考えれば、そうだと思いますが。透明ですか」

「透明です」

「それで、どうになりました。窓の話は」

「ベッドから窓が見えるのです。説明がくどいので、省きましたが、窓は閉めていました。カー

テンだけが開いていました。涼しくなってきましたのでね」

「はい。じゃあ、足を窓側にしてベッドがあると」

「はいそうですが、ベッドは部屋の隅、窓は部屋の真ん中なので、やや右側に見えます」

「それで、その窓がどうかしたのですか」

「カーテンも閉めていません」

「はい」

「何故窓が気になったのかと言いますと、これは夜の話なのですが、寝付けなかったからです。体調が悪いとき、逆に眠れないことがあるんでしょうねえ。薬は飲んでいません。風邪っぽいだけです。目を閉じてても、目の筋肉が痛いほど瞼が下りないので、無理をせず目を開けていました。枕を高くして。そのため、窓が視界に入ってきました。これはいつも見ているはずなのですが、窓そのものなどじっくりと見ていません。それにいつもはカーテンを見ているのであって、窓を見ていない。カーテンがないと隣の家の屋根や窓、そして手前に庭木が見えます。それらはいつ見ても同じです。葉の変化はあるのですが、窓の向こう側を見ることは殆どありません。隣の家の窓も見えますが、いつもカーテンが閉まっています。そしてこちらもいつもカーテンは閉めています」

「隣の家に何か異変が」

「違います。窓のすぐ向こう側、窓にへばりつくように、いるのです」

「え」

「窓の向こうに何かいるのです」

「何かとは」

「人が通ったり」

「ああ」

「大きな顔が、窓から覗いていたり」

「何とも言えない話ですねえ」

「何でしょう」

「見覚えのある顔ですか」

「ありません。それにサイズの的にも、そんな大きな顔はありません。窓一杯の顔ですから」

「そんな窓一杯の大きな顔なら巨人でしょ。立ったまま二階の窓が覗ける」

「その身長なら三階の窓でも覗けそうですが、そんな巨人いません」

「それよりも、そんなものを見て、どうもないのですか」

「はい、気が付かなかっただけで、ずっと出ていたのかもしれない」

「どういう意味ですか」

「非常に説明が重複しますが、窓など見ていなかったからです。それにカーテンはいつも閉まっていますし。昨日はたまたま開けたのでしょう。そして、いつもはベッドの上からしげしげと窓など見ませんから」

「窓の前に、何か置いていますか」

「背の低い本箱です。その上を棚として使っています」

「ベッドからだけではなく、窓を見る機会があるでしょ」

「大概是カーテンが閉まっていますから。これは隣の家との暗黙の約束のようなものかもしれません。どちらも閉めています」

「じゃ、昨夜はどうして開けていたのですか」

「それがよく分かりません。体調が悪くなったので、風でも入れようと、カーテンを開けたのでしょう。しかし窓を開けようとしたところで、やめたのかもしれない」

「それで、閉め忘れたカーテンで、窓の外が見える状態になり、さらに風邪の症状で逆に目が冴えて眠れないので、窓をじっと見ていたということで、いいですね」

「はい」

「同じ場所、同じものをじっと見ていると、そのものが動き出したりするものです。見詰め続けると、別のものが見えてくることもあります」

「ないものでもですか」

「そうです。もう目で見えていないのです」

「じゃ、その大顔も」

「そうです。何の用事があるというのです。その大顔さん。あなたに用事があるはずでしょ。それに知らない顔なんでしょ」

「反射して、よく見えなかったのですが、ダルマさんのような顔です」

「または」

「え」

「あなたは眠れないので、窓を見ていたと言いますが、寝ていたのでしょうか」

「そうなんですか」

「結局眠られたでしょ」

「はい、いつの間にか寝付いたようで、起きると朝でした」

「目を開けたまま眠っていたのかもしれませんが。窓と夢とが重なったような。これは夢でなくても、寝入りばな、色々な映像が出て来るでしょ」

「そういえば」

「思い当たりましたか」

「あの達磨顔、寝る前にたまに浮かんだりしていました」

「間隔は」

「何年かに一度程度です」

「きっとウトウトしていたのでしょう」

「幻覚じゃなかったのですね」

「際どいところでしょうねえ」

「今度はよく注意して、窓を見ることにします」

「はい、お大事に」

了